

主 題：ユダの勧め⑥

聖書箇所：ユダの手紙 21b節

ユダの手紙をお開きください。教会の中に偽りの教師たちが入り込んで来て、真理を惑わしている状態にあって、ユダは信仰者はどのように生きるべきなのかを教えます。

★ 信仰者はどのように生きるべきなのか

1. みことばにしっかりと立つ
2. みことばを生きる

我々の信仰が成長しているならば、どんな教えが入り込んで来てもそれに惑わされることはないのだと。だから我々ひとりひとりの信仰が成長することが必要だということをユダは教えました。

◎ 祈りについて

また、同時に私たちは“祈り”を必要としています。でもその“祈り”は救われる前から行ってきたような祈りではなくて、いつも主のみこころを求める“祈り”でなければならないのだとみことばは私たちに教えてくれます。もちろん私たちは神の前に我々のさまざまなことを持って行くことができます。ただ私たちがその“祈り”において確信すべきことは、主のみこころは必ずなされ、しかも主のみこころが最善だということです。主の栄光が現されるためにみこころがなされることが必要だし、また主のみこころはあなたや私にとっても最善だということです。私たちはみこころを求めるだけではなく、示してくださったみこころに喜んで従っていく者になる、そのようにして歩み続けていきなさいとユダは教えてくれます。

3. 神を愛すること

私たちが三つ目に見てきたことは、神を愛するということでした。「神の愛のうちに自分自身を保ち」と21節が教えます。神への従順を教えていることを学んできました。神を愛するというのが我々にとって最も大切な戒めであるということはもう言うまでもありません。ひとりの律法の専門家がイエスを試そうとして「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」と質問をします。主イエス・キリストは「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。これがたいせつな第一の戒め」だとお答えになります。(マタイ22:34-38) だから私たちは神を愛することが大切なことはわかっています。しかし、問題は神を愛するというのはどのように生きるのかがわかっているかどうかです。これまで神への愛というのは感情的に何か温かいものを神に対して感じることではないということを見てきました。それ以上のものです。最初にお話ししたように、神を愛することは神に対して従順であること、神の命令に従って行くことです。なぜそれを教えているかということ、神がそれを望み、それをお喜びになるからです。

1ヨハネ5:3を見ると、ヨハネは今私たちが見ていることについてこんなふうに教えてくれます。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。」とあります。この「神を愛する」ということは神への愛を教えています。ここに「神」と「愛」という二つの名詞が並んでいます。「愛」という名詞は行動を伴う名詞です。ヨハネはここで神ご自身が我々の愛の行為を受ける対象だということを明確にしています。ですからこの「神を愛する」と訳されているところはまさに神への愛を言わんとしています。そしてもう一つ注意しておかなければいけないのは、この「神を愛するとは」と「神の命令を守ることです」との間にある接続詞がついていることです。それは「それで」とか「それだから」を意味することばです。ですから3節を原語から直訳すると「これが神への愛である。それで神の命令を守り、行い続けるのだ」となります。しかも、この「神への愛」、「守る」という二つの動詞は現在形を使っています。ですから神を継続して愛し続けること、神の命令を継続して守り続けること、このように記されているのです。だから機械的にこの命令を守りなさいと言われるから守るとか、だれかに命じられたから守るというのではなくて、私たちが神の命令、神のみことばに従っていこうとするのは、神を愛することが動機でなければならないとヨハネは教えてくれるのです。

ですからこのメッセージでヨハネが言っていることは、神の命令に従おうとしているあなたは、その行動の動機が神に対する愛となっているのかどうか、神への愛があなたの原動力となって、神の命令に従っていこうという生き方を生み出しているかということ。そうすると結構ハードルは高いですよ。神が言われているからしましょうというのではなくて、神を愛する愛がその行動を生み出しているかどうか、みことばに従う動機が神への愛なのかどうかと問われているのです。何回やってみてもなかなかそんなふうにはできませんと、そういう思いを共有される人がたくさんおられると思います。でも3

節のみことばはそこで終わってはいません。「その命令は重荷とはなりません。」と続くのです。つまりヨハネが何を教えようとしたのかというと、このような正しい動機を持って神の命令に従っていくこと、神を愛するゆえに神の命令に従っていくことは不可能ではないということです。不可能なことを要求しているのなら、それは当然私たちにとって重荷ですが、私たちはこういうふう生きていくことができるということです。神への愛という正しい動機を持ってみことばに従順に従っていく歩みを生み出していき、そういう歩みが可能であり、恐らく多くの人たちがそのような思いを持って歩んでおられることだと確信します。

さて、しばらくこの神を愛するという事について考えてみたいと思います。というのは非常に重要なテーマなので、今から二つのことをご一緒に見たいと思います。

1) すべてのものよりも神を愛すること

神を愛するというのとはどういうことかということ、何ものよりも神を愛することです。すべてのものよりも、自分の愛する者たちや自分自身よりも神を愛することです。確かにそれは聖書が私たちに命じていることです。あなた自身よりもあなたの愛する家族よりもわたしを愛するかと。

(1) なぜ神以外のものを愛してはならないのか

実は二つの理由が考えられます。

① ねたむ神

一つは私たちの神はねたむ神だと聖書が教えています。十戒の中にも出てきました。出エジプト 20 : 5 で「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である」と言われた。また同じように出エジプト 34 : 14 でも「あなたはほかの神を拝んではならないからである。その名がねたみである主は、ねたむ神であるから。」とあります。「その名がねたみである主は」、これが主の名前だと書いてあります。日本語で訳された「ねたみ」ということばを聞くと、恐らく皆さんは余りよくない意味に取られると思います。広辞苑は「他人の優れた点に引け目を感じたり、人に先を越されたりしてうらやみ、憎むこと」と定義します。自分よりも優れた人や自分よりもすばらしい功績を成し遂げた人、自分の持っていないものを持っている人がいたら、その人に対してねたみを覚えてしまう。こうして見ると確かに「ねたみ」ということばは悪い意味で使っています。ではイエス様や旧約聖書は私たちに神とはこんな方だということを教えてくれているのですが、「ねたむ神」と言った時に、人が偶像に心を奪われて崇拜を捧げることや偶像そのものに対して、神が神ご自身に引け目を感じたり、そのことをうらやましく思ったり、ねたましく思うと言っているのかということ、違います、そうでないことは明らかです。なぜならこの私たちの神以外に神は存在しないからです。神が今私たちが思うような意味で偶像崇拜する者たち、またその偶像に対してねたみを抱くということはありません。

では、どういう意味で「ねたむ神」と言われているのかです。実はこれは人々に対する、あなたに対する神の愛を教えているのです。ヨエル 2 : 18 に「主はご自分の地をねたむほど愛し、ご自分の民をあわれまれました。」とあります。ここではこの「ねたむ」という同じヘブライ語のことばが「ねたむほど愛し」と訳されています。またゼカリヤ 1 : 14 では「私と話していた御使いは私に言った。『叫んで言え。万軍の主はこう仰せられる。「わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。」とあります。実はこの「ねたむ」と訳されていることばは「熱心な」とか「ひたむきに」、「熱烈」という意味があります。つまり神が我々人間をどのように愛してくれているのかを表しています。ヨエルでは「ねたむほど愛した」、ゼカリヤで「わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。」と同じ訳がされています。ただここには「激しく」という形容詞がつけられています。このゼカリヤ 1 : 14 を直訳すると、「エルサレムとシオンをねたんだ、大きな(激しく)、ねたみ」と続きます。「エルサレムとシオンをねたんだ」と動詞が出ています。そして「大きな」という形容詞があって最後にまた「ねたみ」という名詞が出てきています。ということは直訳すれば「大きなねたみでねたんだ」となります。日本語の訳にあえて「愛」を入れたのは、このことばが持っている意味、伝えたい意味が実はそこにあるからです。

これを私たちが理解するためには、ちょうど伴侶に対する夫婦の愛のようなものを思い浮かべてください。愛する伴侶が自分以外の人に好意を持つならば、そこにねたみが生じます。その伴侶のことを愛しているからです。また自分の愛する伴侶をだれかと分かち合うことなどあり得ません。つまりこの「ねたむ」ということばをもって神が言わんとしていることは、まさに神がそのようにイスラエルを愛し、ご自分の民を愛してくださっているということです。私たちはその神の愛をあおいイエス・キリストを通してはっきりと知りました。神が人として来てくださり、十字架に架かってくださり、我々の罪の贖いを成し遂げてくださった。この犠牲はあなたのことを愛してくださっているということです。この旧約の「ねたむ」というのは、例えば親が子どもを愛するように愛してくださっている、神はそれほどもあなたを愛してくださっていると言わんとしています。ですから、そのように愛されている私たちがもし神以外のものを愛するならば、それがどれほど神の心を痛めるのか、そのこと

は説明するまでもありません。

② 神への敵対

また、神様は確かに「ねたむ神」と言われているし、同時に神以外のものを愛することは神に対して敵対する行為だとみことばは教えます。新約聖書ヤコブ4：4は「貞操のない人たち」という非常に厳しいことばで始まっています。この4節は、神が心を痛めておられる様子が記されていて、なぜ神が心を痛めておられるのか、その理由は結婚の契りを破ったからであると記されています。聖書の中で神と信者の関係というのはまさに婚姻関係のようなものとして表現されています。主イエス・キリストは教会（建物ではありません）を、我々イエス・キリストを信じる者たちを花嫁としてごらんになっておられる。ですから双方が愛し合う関係です。主イエス・キリストは教会を、我々信仰者を完全な愛で愛してくださっている。同時に私たちがそのように神を愛することを望んでおられる。ですからこの4節で「貞操のない人たち」と書かれているのは、その人だけを愛する、神だけを愛するという誓いを破ったのだと。

その後4節に説明があります。「世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と書かれています。神以外のものを愛する罪の話です。記されている「世」というのは神が創造されたこの世界、この宇宙の話ではありません。この「世」というのは神を信じない、神に逆らう「世」の話です。サタンを主人として彼の意向に沿って進んでいるこの社会です。この世の流行やこの世の考え、そういったものはすべて彼らの主人であるサタンから来ているもので、その「世」とあなたたちが友達——ギリシャ語のフィレオを使い、その「世」に愛情を抱くということ——になりたいとするならば、それは「神の敵」、神の前に正しくないことであると書いてあります。なぜかというと、そのような行為は神に従うのではなくて、神の敵であるサタンに従っていることだからです。おもしろいのは、ここには「神に敵することであることがわからないのですか」とあります。なぜこんな言葉を入れているかということ、この人々は既にこの学びを受けていたからです。あなたたちは学んだでしょう？まだわからないのですかと言っているのです。また4節の終わりの「その人は自分を神の敵としているのです」の「している」というのも我々に大切なことを教えるのです。ヤコブはこの世を愛して世の友になりたいと、そのような生き方を選択しているのは、実はあなた自身だと言っているのです。あなたが神ではなくてそれ以外のものに関心を払っているその責任はあなたなのだとヤコブは言うのです。しかもこの動詞は現在形です。そういう選択を継続して行っているということです。4節の初めのところに「貞操のない人」と書かずに「人たち」と書いています。そういう人たちが複数人いるからです。だから神は悲しんでいると5節に記されています。

神を愛すると言った時に、神だけを愛するのです。ほかのすべてのものよりも、あなたが愛するものよりも神を愛するのです。気をつけないと私たちの趣味も私たちの偶像になりかねない。喜んでそれを神のために捨てることができるかと問いかけてみてください。難しいと思っていたら、ひよっとしたらあなたの愛は神以上かもしれない。神を愛するというのはあなた自身よりも、何ものよりも神を愛することです。イエス様が「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」とマタイ6：24に、同じことがルカ16：13に出てきています。神なのか、それとも別のものなのか、どちらに仕えるのか——。神を愛するというのは、何ものよりも神を愛すること。神よりも愛するものがないかどうかを考えることです。

2) すべてにおいて神に従うこと

もう一つ言えるのは、私たちがイエス・キリストを信じた時にどんな決心をしたのかを思い出すことが必要です。なぜならそれを思い出すことによって神を愛するとはどういうことなのかを我々はもう一度思い出すことができるからです。それを考えるためにマタイ4章を見てください。ちょうどイエス様がサタンの誘惑をお受けになったシーンです。サタンはイエス・キリストを三度誘惑します。最後の誘惑でサタンはイエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて。もしひれ伏して私を拝むならこれを全部あなたに差し上げましょうと誘惑します。10節にイエス様が「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」と答えます。三つのことに気づいてください。

(1) あなたの神である主

一つ目は「あなたの神である主」と書いてあります。「あなたたち」とは言わない。イエス様のことを私たちは知的に知っているだけでは救いには不十分です。この神の救いをいただくためにはこの神が私の神でなければいけない、個人的な関係がなければならないと。

(2) 主にだけ仕えよ

二つ目に「主にだけ仕えよ」と言われた。私たちクリスチャンというのはそのように生きる者となっ

たということです。私たちは主イエス・キリストを知るまで、自分の好きなように生きていました。でも実はそのような生き方を私たちに働きかけ続けているサタンに従っていたのです。私たちの主人は神でないサタンなのかそれともまことの神なのかです。残念ながら私たちは生まれながらに神でないものを主人とし、神の敵に従ってきたのです。感謝なことに神がその罪に気づかせてくださり、悔い改めへ、救いへと導いてくださった。では私たちは何を決心したのかというと、神に背を向けてサタンに従ってきた私は間違っていた、その罪に気づいて、それを悔い改めて正しい神を受け入れてその方に従っていきましょうと決心したのです。救いというのはただ天国に行きたいからその切符を下さい、そんなものではありません。私たちのこれまでの歩みが神の前に罪を犯していたことに気づき、その罪を神の前に悔い改めて、神が備えてくださったこのすばらしい救いを受け入れることです。ということは我々クリスチャンというのは主イエス・キリストを私の主としてこの方に従っていくことを決心したのです。

もう既に私たちはこのユダの学びの中でも見てきました。我々、イエス・キリストを信じる者たちは、まことの神である主イエス・キリストにこの三位一体の神に従う者として生まれ変わったのです。我々はこの方の奴隷なのです。私たちがこの世に生きている目的はこの方を喜ばせ、この方の栄光を現すこと、それが私たちの生きている目的です。そのような目的として造られ、そしてその目的から外れた私たちがもう一度その目的に、神の恵みによって戻していただいたのです。

(3) 引き下がれ、サタン

三つ目に、イエス様は非常におもしろいことを言われました。最初に「引き下がれ、サタン」と言っています。この「引き下がれ」ということばは「退け」という意味でもあります。10節に何が書かれているかということ、主はここでサタンに対して「退け」、「引き下がれ」という命令を与えたのです。11節に「すると悪魔はイエスを離れて行」ったのです。3回試みて、もうどうしようもない、この人に勝ち目はないと思って去ったのではない。悪魔がイエスを離れて行ったのはイエス様が命じたからです。驚くことはサタンも神の命令に従うのです。イエス様が悪霊たちに対して出て行けと言ったら悪霊たちは従ったのです。被造物はこの神に従うのです。もちろん彼らはそれを喜んでみずから進んでなそうとはしません。でも驚くべき真実はサタンでさえも神の命令に従うのです。

考えたら、厄介なのは私たちです。我々は神が命じておられるのにいいえ、従いたくありません、こっちの道を取りたいですと逆らい続けているのです。主イエス・キリストを信じて救いにあずかるということは、私たちはこの方に従うことを決心したのです。でも悲しい現実先ほども見て来たように、従って行きたいし、神の栄光は現していきたいし、神に喜んでいただきという願いを持って生きていながら、神がお喜びにならないことを選択している自分がいるのです。失敗の連続なのです。しかし、救いにあずかった私たちの心の中には、何とかこの神を喜ばせたいとかこの神の栄光を現したいという救われる前になかった思いがあることは事実です。あなたが生まれ変わったことをそれが私たちに保証してくれるのです、だから私たちに救われる前になかったこの神に従って、この神の栄光を現しているという新しい願いが与えられたのです。

ヨハネが私たちに教えてくれたことは私たちが神の命令に従うのは神への愛が動機なのだ。神を愛するからその命令に従っていきなさい、まさにそのような歩みをするならば、私たちは神の愛のうちに自分自身を保つのです。その生き方だとユダは私たちに教えてくれました。

4. 希望を持って歩む

ユダが教える四つ目のことは、21節の後半「私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」、希望です。我々がこの地上を歩んで行く時に必要なのは、希望を持って歩み続けることです。「待ち望みなさい」と書いてあります。まさに今か今かとその到来を待っている様子です。では何を待ち望むのかということ、21節を見ると、「私たちの主イエス・キリストのあわれみを」と書いてあります。一体何の話なのか、感謝なことにみことばがそれを我々に説明してくれています。

21節「永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみ」と書いてあります。ですからこの「あわれみ」というのと「永遠のいのちに至らせる」、つまり救いというものが密接に関連しているということは文脈を見ればわかります。そうすると、「主イエス・キリストのあわれみを待」つ、つまり救いを待つということをするのです。そうすると、出て来る疑問は、いえ、私はもう救われていますよ、救われている私がなぜ救いを待つ必要があるのですかといった疑問が出てきます。確かに私たちは清い、正しい神の前に立つ権利をいただきました。神が私たちのような者を義と認めてくださった。だから私たちはこうして神の前に立つことができます。でもだからと言って、我々は完全に清くされたわけではありません。先ほどから見てるように、罪との葛藤を我々は日々経験しています。この肉をまだ私たちは持っているのです。この救いが完結したのではないのです。この罪のからだからまだ我々は解放されていないからです。だから、この救いを待つということはこの罪のからだから解放されるその日を待

っているのです。

1) 五つの希望

神様が我々信仰者に約束してくださった五つの希望を言います。

(1) 栄光のからだをいただく

一つ目は今我々が話している栄光のからだをいただく、つまり栄化という希望です。イエス様を信じた時に私たちは神の前に義と認められました。神の前に立つことが赦され、信仰生活が始まったのです。この信仰生活において私たちは日々キリストに似た者に変えられていくという聖化の過程を生きています。最終的に私たちは栄光のからだをいただいて救いが完成するのです。私たちが義とされた時に何か欠けていたのか、イエス様の救いが不完全だったと言っているのではありません。救われたことには間違いないのです。ただ私たちは今の生活において罪との葛藤を経験している。この罪の誘惑に対する敗北から完全に解放される日が来るのです。もう罪を犯すことがない日です。もう神を悲しませることのない日です。私たちが栄光のからだをいただいたその時です。これが私たちの希望だと。パウロはこう言っています。「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」、ピリピ3：21です。我々はその日を待っているのです。ヨハネは1ヨハネ3：2で「キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。」、イエス様が私たちを迎えに来てくださったなら、我々はイエス様に似た者、つまり栄光のからだをいただくのです。その日が来るのです。それが我々クリスチャンに与えられた希望です。我々はそれを待ち望みながらきょうを生き、罪との戦いを経験しています。

(2) 主にお会いする

二つ目の希望は、その時に我々は主にお会いするのです。先ほどお読みした1ヨハネ3：2の後半には「私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とあります。その日が来るのです。だれかが見たこともないイエスを想像して書いた絵ではないのです。私たちは私のために十字架で死んでよみがえられたイエス・キリストを実際に見るのです。その日が来るのです。すばらしい約束です。こんな私のような者を、あなたのような人を愛してくださった神に私たちはお会いできるのです。その日が来ます。ですからパウロはテトス2：13で「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」と述べています。イエス様が来てくださるのを待っているのです。ユダもその時に私たちはこの我々の愛する主を実際に見ることになると。

(3) 主を礼拝する

三つ目の約束は、我々がイエス様にお会いした後、我々は主を礼拝します。我々が黙示録を学んだ時に、黙示録4：8からその光景が記されていました。まず最初に天使たちが神を称えていました。教会の代表たち、そしてその輪の中に我々も加わって神を礼拝する様子が4：8から記されていました。こうあります。「彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。』」、神を称えるこの輪の中に我々も入って「昼も夜も絶え間なく」この方を称え続けるのです。そのことを考えるとなぜ私たちが礼拝者として生まれ変わったのかがわかります。天に行った時に私たちは栄光のからだを持って神を礼拝します。栄光のからだをいただいていない今も、私たちは天に行き行こうとこの地上で行うのです。私たちは主に礼拝を捧げる者として生まれ変わったのです。だから私たちはどこにいても、どんな時も、神様を礼拝し続けているのです。神を賛美しながら。神をほめ称えながら、神の命令に従いながら。そのように生きる者へと生まれ変わったのです。

地上にいて私たちが捧げている礼拝は悲しいことに不完全です。なぜならこうして礼拝を捧げている時も我々はいろいろなことを考えたりします。時に私たちは罪を持って礼拝に来ることもある。でも栄光のからだをいただいた後、全くそのようなものから完全に解放されます。そうして私たちは神を昼も夜も終わることなく称え続けていく、そのようなすばらしい特権にあずかるのです。皆さんも日々の生活だけではなくて、こうして日曜日に集まって一緒に神を礼拝する時間でさえ、自分の罪深さに気づきませんか？神様に捧げているが、何を賛美したかよくわかっていない。神様のことを称えていながら私たちの心の中にはそうでない思いがあったり、あの人が嫌いだとかこの人が嫌だとか。またひょっとしたら礼拝が終わったら何をするか考えたり。そういう自分の弱さに気づいた時に私たちは一体何をしているのだろうと嫌になってきませんか？なぜなら神が見ておられるのはそこです。あなたがどんな洋服を着てこの場に来ているかではないのです。どんな心を持ってこの場に座っているかです。情けなく思っている人がいるならば、恐らくこの約束を見た時に、そこに希望を置いているはずで、必ずその日が来る。私たちの心も神の前で喜ばれる状態で、本当に神が喜ばれる礼拝を捧げることができる日が来ると。

(4) 愛する者との再会

四つ目、私たちは愛する者と再会します。パウロは1テサロニケ4：16-17に「御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、」主が帰って来られ、そして「キリストにある死者が、まず初めによみがえり、……生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会う」のだと記しています。確かに私たちは主にお会いするのです。同時にその時よみがえったすべての信仰者と私たちはお会いすると。既に私たちが天に送った主イエス・キリストの救いにあずかっておられた皆さんと我々は再会します。願わくば我々の愛するすべての者がそこに集っていることを願います。でもそのチャンスは今私たちが生かされている間しかありません。祈りながらしっかりとこの福音を伝え続けていくことです。どこで永遠を過ごすのか、後悔しても後悔し切れません。でも我々の愛する者、既に天に凱旋した者たちと私たちは再会できる。その希望を私たちは神様からいただいています。

(5) 褒美をいただく

栄光のからだをいただくこと、主にお会いすること、そして主を礼拝すること、愛する者との再会、そして最後の5番目、私たちは主から褒美をいただくのです。

パウロは2コリント5：10で「私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになる」と教えます。キリストのさばきの座にすべてのクリスチャンが立って、そこで信仰者として歩んだ人生の清算がされます。罪のさばきの場ではありません。罪は赦されたのです。信仰者として歩んだ歩みの報いをいただく、褒美をいただく時です。1コリント3章をお開きください。我々クリスチャンはイエス・キリストを信じる土台を据えました。パウロはこの3章の中で家を建てるという表現を使いながら信仰者としてどのように生きて行くべきなのかを教えてください。1コリント3：10に「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台（イエス様です）を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。」とあります。土台を据えたのはいいのですが、問題はその上にどのように家を建てていくかというのはひとりひとりが注意しなければならないと。13節にこのように続きます。「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」「この火がその力で各人の働きの真価をためすからです」、ここには、「火は各人がどのような働きをしたのかを検査する、働きの真価が判明する」と訳せることばが並んでいます。金や銀など高価な金属の純度を知るためには溶かせばそこに含まれている不純物が上に浮いてきます。それが多ければ多いほど純度が低いということになるのですが、パウロが言いたいことは、我々も神の前に立った時に同じことがなされるということなのです。我々がイエス様にお会いするその時までの地上でのクリスチャンとしての生活のすべての真価が、その純粋さが、その価値が明らかにされる、その日が来るということなのです。だからひとりひとり注意を払いなさいと。

私たちはどうもどういうことをするかという行動に重きを置いてしまう。どんな奉仕をするとか、どれだけ熱心に行っているかと。神の関心は私たちの心です。こうしてみことばを通して私たちが主のみこころを知った時にそれに従っているかどうかです。どれだけ知識があるかはどうでもいい話です。それが生きていなければ全く無意味です。なぜならパリサイ人や律法学者の多くは悲しいことに永遠の滅びに至ったのです。知識はありましたが、神は彼らの個人的な神ではなかった。私たちが気をつけなければいけないことはどんなふうに日々を生活しているかです。神の前に価値ある歩みをしているかどうかです。永遠に残るもののために生きていくかどうかです。パウロが言ったように、それぞれが注意を払いなさいと。だから私たちは自分の生活をしっかりと吟味して、どんな動機でしているのか、神のみことばに従いながら、神が望んでおられるように生きていくかどうか、そのことを探りながら生きることだと。その真価があきらかにされる日が来るのだと。

きょう私たちは、神が私たち信仰者にすばらしい希望を下されたことを見てきました。間違いなく神はあなたが希望をいただいた者としてそれにふさわしく生きることを望んでおられる。すべての人は死んで終わるのではない。我々はその後にすばらしい祝福を神様から約束されているのです。だったらその祝福をいただいた者として、約束されている者としてそれにふさわしく生きて行くことです。

◎ 神様が希望を与えてくださった理由

なぜ神様が私たちにこんなすばらしい希望を下されたのか、これを見てきょうは終わります。神があなたにその希望をくださった理由は証のためです。1ヨハネ3章で私たちはイエス様にお会いするということを見てきました。栄光のからだをいただき、イエス様の御姿を我々は拝することができる、その日が来ることを1ヨハネ3：2が教えていました。3節にこう続きます。「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と。つまりこの希望が与えられ、この

日が来ることをしっかりと覚えている人は、与えられた日々を神の前に正しく生きようとすると言っています。この世を愛するのではなく、この世の友となるのではなくて、罪を愛してそれに従っていくのではなくて、きょう主にお会いしてもいいようにその備えをもってこの日を生きるということです。そうすれば人々はあなたが違うということを見るのです。そのことに気づくのです。ペテロも同じように神の日が来る、さばきの日が来るという話をした後、2ペテロ3：14で「そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。」と結論を言うのです。イエス様にお会いするその日をしっかりと待ち望みながら、きょうイエス様にお会いする、そのような思いを持ってこの日を生きなさいとみことばは私たちに教えます。

あなたがそんなふうに生きれば、人々はあなたを通してイエス様を見るからです。私たちのためにこう生きなさいと言っているのではないのです。我々は主のために生きる者として生まれ変わったのです。この主のすばらしさを証するために我々は生きているのです。希望をいただいた皆さん、しっかり希望を覚えることです。そしてその希望をいただいた者として生きることです。つまりこの日に私の地上でのすべての働きは終わるかもしれない、だからその備えをしてこの日を過ごしなさいと。それが希望をいただいた者としてふさわしい歩みだと。ぜひそのように歩んでください。神はあなたを助けてくださり、あなたを用いてくださる。あなたを通して神のすばらしさを証ししてくださる。そのためにも永遠をしっかりと覚えてきょうを生きることです。地上ではなくて、天に宝を積むことを覚えて、きょうを生きることです。希望をいただいた者としてどうか歩み続けてください。